

【現代語訳】

(碑の蓋)ふた 尚衣奉御しょういほうぎよの官位を尊敬する井真成先生の墓誌に贈る

井真成公に尚衣奉御の官位を贈り、併せて墓誌文に添える。

公は、姓を井、名を真成と言ひ、国名は日本と称する。

才能は天賦てんぷのものと讃たたえられたが故に、

遠い国の命令を携たずえて我が国に馳せ参じたのである。

礼儀と教養を積み、衣冠束帯いかんそくたいして唐の朝廷の官位に就いた。

公は、ともがらとするに得がたい人物であつた。

怠けることなく勉学に勤しんでいたのに、思いもよらず

未だ道いまを極め終る途中で亡くなつた。

瞬またく間に流れた公の死の時に立ち会うとは、

奔走ほんそうする四頭馬車が行き過ぎる間隙かんげきに巡り会うようなものだ。

開元二十年（732年）正月六日を以て、

公は官舎で生涯を終えた。三十六歳であつた。

玄宗皇帝は心を傷め、死後に尊んで称号を贈る儀典ぎてんを催し、

詔みことりを發して尚衣奉御の官位を贈つた。

葬儀は公葬こうそうとなり、その年の二月四日に行なわれた。

長安郊外の萬年まんねんけんさんすい県澹水東岸の原はらに埋葬するのは、
儀礼の定めではあるが、

嗚呼あゝ、夜明けに棺ひつぎの車を引き、

官位を記す赤い旗の行列に歩くのは哀しいものだ。

遠い異国の暮れゆく日に倒れたと云うのか、

人里離れて永眠するのを悲しむと云うのか、

その墓誌の文言に曰く、

運命を握るのは常に天ではあるが、

ここが遠く離れた地であることが哀かなしい。

亡骸なきがらは既に異国の地に埋められたとしても、

魂たましいはことごとく故郷に帰ることであろう。

令和五年十二月二十日

大中臣正比呂 拙訳

